

報告論文のタイトル:防衛的特許出願のオープン・イノベーション効果:インクジェット特許の分析

報告者・共著者(大学院生は所属機関の後に(院生)と記入してください。)

報告者氏名:絹川 真哉

所属:駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部

共著者1氏名:

所属:

共著者2氏名:

所属:

論文要旨 (800字から1200字, 英文の場合は300から450語)

競合企業の特許獲得を阻止する目的で出願される防衛特許には、特許獲得競争を引き延ばすことによる研究開発の2重投資という非効率性がある一方、出願公開一般がもつ技術知識のスピルオーバー効果が生じる可能性がある。インクジェット関連技術の防衛出願について、「インクジェット記録方法およびその記録媒体」特許出願データをもとに、以下2つの分析を行う。

1つ目は、防衛目的の技術公開に関する経済理論モデルのデータによる検証である。特許獲得レース引き延ばしを目的とした防衛的公開に関する2つの理論モデル、Baker and Mezzetti (2005)とBar (2006)を紹介し、モデルの結論をデータと比較していく。とりわけ、進歩性等の審査基準の変更が防衛的公開のインセンティブに与える影響については、2つのモデルで異なる結論となっている。どちらのモデルがより現実と整合的かについて、特許庁の審査基準変更前後の防衛特許件数の変化から見ていく。出願公開の情報から直接、防衛目的の出願を特定することはできないが、防衛目的の出願の多くが審査請求されないこと、そして、特許獲得競争の引き延ばしが出願公開の目的であれば、最終的な発明の特許出願の際に防衛出願が自己引用される可能性があることから、審査未請求でかつ自己引用された出願を(狭義の)防衛出願と定義して分析する。データからは、進歩性基準の上昇により防衛的公開が減少するという理論予測の方がより整合的である可能性が示唆される。

2つ目の分析は、防衛目的の特許出願が社会全体で技術発展を促す機能に関する実証である。とりわけ、インクジェット技術の異業種・異分野技術開発へのスピルオーバーに着目、「オープン・イノベーション効果」と呼ぶ。インクジェット防衛出願のオープン・イノベーション効果を、上で定義された防衛出願が他者の他分野技術特許出願に引用された件数とし、技術分野の広がりや被引用件数の増加率からスピルオーバーの範囲と速さを調べる。分析の結果、狭義の防衛出願は、審査請求された出願、審査未請求で自己引用もされなかった出願と比べて数は少ないものの、被引用の技術的広がりが最も広く、かつ被引用件数の増加率も最も高いことが分かった。防衛出願は、同一技術分野における企業間競争という視点からは非効率性を生じさせるが、経済全体の視点からは、少なくとも正の外部効果を生んでいる可能性がある。